フランス語の進行表現にみられる諸相（１）

—中国語・日本語の視点から—

Some Aspects of the Progressive Expressions in French（１）
：From the Point of View of Chinese and Japanese

成戸　浩嗣　Koji NARUTO

概　要

周知のように、フランス語には進行中の動作を表わす方法として

①動詞の現在形(直説法現在形)
②“être en train de＋不定詞”形式
③動詞の半過去形

が存在し、①、③は時制を反映した動詞の変化形の系列を構成する成分、②は進行中の動作であることを明示するイディオムに不定詞が組み込まれた成分とされるのが通例である。②は進行中の動作を表わす働きを有する点において①、③と共通するものの、①、③と同一レベルではあつかわれていないわけであるが、このことには、フランス語話者によるコトガラのとらえ方、言語表現の仕方のメカニズムが深く関わっている。一方、進行中の動作を表わす表現に用いられる成分として、中国語には“呢”、“在(V)”、“(V)着”が、日本語には「テイル」、「テイルトコロダ」が存在する。これらの使い分けと①、②の使い分けとの間には、共通点・相似点や相違点がみられ、言語によって異なる動詞の性格や、進行表現を構成する各成分の特徴と深く関わっている。また、②、③はいずれも過去において進行中であった動作を表わすことが可能であるため、①、②の場合と同様にその使い分けが問題となるものであり、上記の中国語・日本語諸成分の使い分けとの間に共通点・相似点や相違点がみられる。

本稿は、フランス語において進行表現を構成する上記の諸成分を中心に、中国語・日本語において進行表現を構成する諸成分・手段との共通点・相似点や相違点について考察することを通して、先行研究によっては明らかとされなかったフランス語進行表現の諸特徴を明らかにするとともに、中国語や日本語を母語とする学習者がフランス語進行表現を正しく理解し、母語の発想に引きずられることによって生じる誤用を避けつつ適切に運用できるようになるための一助とすることを目的とする。

なお、①～③を用いた進行表現のアスペクト的概念は、『フランス文法大全』: 253、『新フランス文法事典(“aspect〔相〕”の項)』、『現代フランス広文典』: 230 などにみられるように「継続相(“aspect duratif”)」とされるのが一般的であり、「進行相あるいは進展相(いずれも“aspect progressif”を指す)」は“être en train de＋不定詞”が表わすアスペクトとは別の範疇として、“aller＋ジェロンディフ(＝en＋現在分詞)”や同一動詞の反復によって示されると規定される [1]。一方、学習書においては、『フランス語ハンドブック』: 44 のように「動作の進行」とするものが存在する。「進行相」および「継続相」は、「結果相」や「持続相」とともにその概念規定が諸説において、また対象とする言語によって異なり、不統一の状態である。中国語においては、進行中の動作を表わす表現に用いられる成分として“呢”、“在(V)”、“(V)着”が存在し、それらの働きは「進行」、「持続」などの用語によって説明されるものの、概念規定は諸説により異なっているのが現状である。日本語においては、「テイル(トコロダ)」の働きの考察にあたって「進行」あるいは「進行態」という用語を用いる金田一 1976 a：56、中右 1980：112-114、寺村 1992：335、青木 2000：93、98 のほか、「継続・進行」という用語を用いる森田 1990：33-34 などが存在する。また、吉川 1976：165 は、「継続」とは動きが

その過程の途中にあること、すなわちある動きが始まってまだ終わらない状態にあることをいうとしているのに対し、竹沢 1991：60 は、進行相と結果相を「継続」という概念が具体的言語条件の中で実現しえる対峙的意味と位置づけている。さらに、中国語および日本語を対象とした中川 1990：230 は、動詞の意味する動作を「発生～持続～帰着～(結果の)存続」の四段階に分け、持続を動作の一過程と位置づけている。本稿では、①～③を用いたフランス語進行表現と中国語・日本語の進行表現との対照を行なうため、動作が開始から終了にいたる過程において継続中である段階を指す用語として「進行」を用いることとする。

キーワード

1. 進行表現　progressive　expression
2. ムード　mood
3. アスペクト　aspect
4. 空間表現／時間表現　spatial expression／temporal expression
5. 進行／持続　progress／duration

目　次

1　非アスペクト形式による進行表現
　1.1　動作の進行と話者の判断
　1.2　非アスペクトの進行表現に用いられる動詞の性格
2　アスペクト形式による進行表現
　2.1　空間表現から時間表現へ
　2.2　進行と持続
　2.3　「テイル(トコロダ)」表現が対応しない“être en train de＋不定詞”
3　おわりに

1　非アスペクト形式による進行表現

1.1　動作の進行と話者の判断

現在形を用いた表現が進行中の動作を表わす要因については、入門・初級のテキストにおいて説明されることが少ないようであり、“être en train de＋不定詞”とともに進行中の動作を表わすと述べるにとどまるのが通例である。動詞の現在形は、青木 1987：20 の記述にみられるようにいわゆる未来時、近接過去などの非進行動作を表わすことも可能であり、進行中の動作を表わす形態上の特徴を有するわけではない[2)]。例えば

(1) Il prend un bain.
(彼は風呂に入る／入っている。)(久松 1999：27)
(2) Il joue au golf.
(彼はゴルフをする／している。)(同 2002：20)
(3) Qu'est-ce qu'elle fait en haut？
(彼女は二階で何をするの／しているの。)
(同上)　※いずれもカッコ内日本語は筆者

は場面や文脈によって、日本語であれば「～(ス)ル」、「～(シ)テイル」のいずれによって表わされるコトガラを前提として用いることも可能である[3)]。(1)～(3)に対し、例えば

(4) Pierre travaille **en ce moment** dans son bureau.
(ピエールは今オフィスで仕事をしている。)
(青木 1987:23)　※カッコ内日本語は筆者
(5) Bien qu'elle soit fatiguée, elle travaille encore.
(彼女は疲れているにもかかわらずまだ仕事をしています。)　(久松 1999：110)
(6) Il lit **depuis ce matin.**
(けさから彼は本を読んでいる。)
(『現代フランス広文典』：230)

の場合には、発話時のコトガラであることを明示す

る“en ce moment”、過去から発話時にいたるコトガラであることを明示する“encore”、“depuis ce matin”のような成分が含まれているため、“travailler”、“lire”は進行中の動作を表わすこととなる。現在形が進行・非進行いずれの動作を表わすにせよ、いわゆる未来形に対しては一つの範疇に属するものとしてあつかわれている。このことは、佐藤 2005：92 が、動詞の未来形を用いた

(7) Je **travaillerai** l'année prochaine.
(来年、私は**働くでしょう**。)
(8) Je **téléphonerai** demain.
(明日、私は**電話するでしょう**。)

に対してそれぞれ

(9) Je travaille.
(私は**働いています**。)
(10) Je téléphone.
(私は**電話します**。)

のような進行、非進行の動作を表わす表現を挙げ、(9)、(10)はいずれも、「今のこと」をいっている、すなわち発話時におけるコトガラを表わしているとしていることによっても理解できよう。

現在形による進行表現が成立する要因について、青木 1989：307-308 には、発話時において話し手が事態の成立を確認する時に、“travailler”のような継続動詞は現在進行形の解釈を受ける旨の記述がみられる。また、青木 1987：23 には、(4)における“travailler”は話者の確認(断定)のコトガラとして扱われている、すなわち“travailler dans son bureau(オフィスで仕事をする)”が“ne pas travailler dans son bureau(オフィスで仕事をしない)”あるいは“faire d'autre chose que ≪travailler≫(仕事以外のことをする)”の価値から区別され、確かなものとしてとらえられていることを表わすほか、発話時点に定着される一つの occurrence を問題としているという記述がみられる。このことは換言すれば、現在形を用いて進行中の動作を表わす用法は、継続可能な動作動詞を用いた表現において、動作が発話時に進行中であることを話者が認めることによって成立するということであり、現在形による進行表現がコトガラに対する話者のムードを反映した結果として成立することを意味している。

上記のような現在形による進行表現の成立に類似した現象は中国語にもみられ、進行アスペクトのマーカーを用いない

(11) 我现在学习中国话**呢**。(船田 2003：145)
(12) 我正吃饭**呢**。(大原 1973：23)

のような表現が成立する。この場合、発話時であることを明示する、いわゆる語気助詞の“呢”が用いられるのが一般的である[4]。このような場合における“呢”の働きについて森 2000：268-269 には、動作や状態が目下進行中(最中)であると話者が認めることであり、“呢”自身が進行や持続を表わすのではなく、あくまでもそれを認める話者の心的態度(ムード)である旨の記述がみられる[5]。このように、動詞の現在形を用いたフランス語進行表現、“呢”を用いた中国語進行表現は、いずれもコトガラに対する話者のムードを反映しており、動作が発話時に進行中であることを話者が認めることによって成立する非アスペクト表現である点において共通している。

ところで、現在形を用いたフランス語表現、“呢”を用いた中国語表現は、進行中の動作のほか、未然の動作を表わすことも可能であり、それぞれ

(13) Pierre arrive demain.
(ピエールは明日到着するでしょう。)
(青木 1987：21)
※カッコ内日本語は筆者
(14) 明天早上我们打麻将**呢**。
(明日の朝私たちはマージャンをしているでしょう。) (船田 2003：145)

のような表現が成立する。青木 1987：21-22 には、(13)のような未来時のコトガラを表わす表現は、前もってつくられたコトガラを確実なものとしてうけとめることを表わし、コトガラを確実ととらえる断定モダリティーは発話時点に関係づけられるものである旨の記述がみられる。青木の記述からは、未然の動作を表わす表現が、発話時における話者の判断を含んでいる点において進行中の動作を表わす場合と共通していることがうかがわれる。一方、神田 1989：29-30 には、中国語のいわゆる北方語では、例えば

(15) 我写字**哪**。(私は字を書いている。)

※カッコ内日本語は筆者

のような“呢(北京語では“哪”)”を用いた表現は、「動作の進行」というよりは

(16) 我没去**哪**。(私は行っていない。)

※カッコ内日本語は筆者

と同じく「動作の未完成」の表現であり、その働きは「未然」を表わすことであるため、動作が未完成である、すなわち「動作が終わっていない→継続中である」がゆえに動作の進行とも解釈できるにすぎない旨の主張がみられる [6]。これらの記述からは、現在形を用いたフランス語表現、“呢”を用いた中国語表現が、ムード的手段によって動作の進行を表わす働きをする点においては共通する反面、前者は「発話時において話者が確実と判断する」ことによって、後者は「発話時において動作が未完成であると話者が判断する」ことによってそれぞれ成立するというように、その成立にいたる過程が異なることがみてとれる。

1.2　非アスペクトの進行表現に用いられる動詞の性格

現在形を用いたフランス語表現、“呢”を用いた中国語表現が進行中の動作を表わし、それぞれ“être en train de(＋不定詞)”表現、“在(V)”表現と並立するのは、動詞が継続可能な動作を表わすものである場合に限られる。このことは、フランス語表現については、青木 1987：26 に、

(17) Ne le dérange pas. Il **travaille**.

(17)’ Ne le dérange pas. Il **est en train de** travailler.

のように現在形と“être en train de＋不定詞”が競合するのは、“travailler”が(瞬間相ではなく)継続相の動詞であることによる [7]旨の記述がみられることによって理解されようし、中国語表現については、森 2000：279 に、

(18) 鸽子飞**呢**。(ハトが飛んでいる。)

における持続(本稿における「進行」)的な意味は

(19) 下雨**呢**。(雨が降っている。)

(20) 他摆着手**呢**。(彼が手を振っている。)

における“下雨”、“摆手”と同様に、“飞”がそもそも持続的な動作(本稿における「継続可能な動作」)であることから発生する旨の指摘がみられることや、张亚军 2002:257 が、いわゆる時間副詞として進行を表わす働きをする“在”と組み合わされる動詞の主なものの一つとして「持続可能な動作を表わすもの(具有“持续”特征的动作行为动词，即动作行为本身能持续，其内在时间过程结构具有较强的“续段”)」を挙げていることによっても理解されよう。

フランス語動詞や中国語動詞の場合とは異なり、日本語動詞のいわゆる終止形を用いた表現の場合には、周知のように、それが継続可能な動作を表わすものであってもそのままでは進行中の動作を表わすことができないため、

(17) Ne le dérange pas. Il **travaille**.

(11) 我现在学习中国话**呢**。

に対してはそれぞれ

(17)”邪魔しちゃだめよ。勉強し**テイル**んだからね。　(青木 1989：307)

(11)’私は今中国語を勉強し**テイマス**。　(船田 2003：145)

のようなアスペクト形式「テイル」を用いた表現が対応することとなる、すなわち非アスペクト表現によって動作の進行を表わすことができない [8]。

2　アスペクト形式による進行表現

2.1　空間表現から時間表現へ

日本語の「テイルトコロダ」は、「テイル最中ダ」に置き換えられることからも明白なように、「トコロ」が空間的な概念から時間的な概念、すなわち、限られた空間的な広がりの概念から開始と終了の間に存在する限られた時間的な広がりの概念に変化しており、発話時において動作が位置する段階(＝進行中の段階)を表わしているため [9]、空間表現を時間表現に転用して動作の進行を表わすにいたった表現形式であるということができる。同様の現象が中国語

の“在(V)”についてもあてはまることは、《外国人学汉语难点释疑》の以下のような記述からもみてとれよう。同：166-167 は、

(21) 他在教室。(彼は教室**ニイル**。)
※カッコ内日本語は筆者

について“‘在’表示‘在什么地方’(be in/on/at…)”とし、

(22) 他**在**上课。(彼は授業をし**テイル**／受け**テイル**。) ※カッコ内日本語は筆者

について“‘在’是‘正在’(be…ing)”とする一方、

(23) 小王在家吗？―不在。他**在**教室上课。
(王さんはいますか。―いません。彼は教室**デ**授業をし**テイマス**／受け**テイマス**。)
※カッコ内日本語は筆者

における“**在**(教室上课)”の働きについて“在上课＋在教室”としている。“在”は、(21)においては“他(かれ)”の位置を示す成分(「**ニイル**」に対応する)として、(22)においてはアスペクトマーカー(「**テイル**」に対応する)として、(23)においては“上课”という動作が行なわれる範囲を“教室”と限定する(「**デ**」に対応する)と同時に、“上课(授業をする／受ける)”が進行中であることを表わすアスペクトマーカーとしての役割をもになっている[10]。(23)と同様のケースとしてはさらに、

(24) 她**在**楼上和小李谈话。
／She **is** hav**ing** a talk with Hsiao Li upstairs.
(《實用英語語法》: 106)

(25) 我**在**学校参加一个会议。
／I **am** attend**ing** a meeting at school.
(同上)

のような、いわゆる進行形を用いた英語表現との対応例が存在する。(24)、(25)の対応例は、“**在**楼上”、“**在**学校”のように空間限定に用いられている“在”から進行の意味をよみとった結果である。但し、(23)～(25)と同様に“在・N(空間)＋V”形式をとる表現の中には、

(26) 你们每天**在**哪儿上课？―**在** 309 教室上课。
(あなたたちは毎日どこで授業を受けるの？―309 教室です。)
(≪外国人学汉语难点释疑≫:167)
※カッコ内日本語は筆者

のような非進行表現も存在し、この形式における“在”が日本語の「テイルトコロダ」ほどには進行表示のマーカーとして特化された成分となりきっていないことがみてとれる。“在・N(空間)＋V”表現が進行の意味に解されるためには、表現の前提となる客観的事実において動作が進行中であることが前提となるのである[11]。

ところで、“在”が動詞に前置されて進行を表わす(22)のような用法については、一般に、(26)のような“在・N(空間)＋V”形式によって動作の範囲を限定する用法から

(27) 他在那儿看书。(中川 1990：222)

のような“在那儿”を用いた表現を経て進行アスペクトのマーカーへと変化していったものであるとされているが、このことは(23)～(25)が動作の進行を表わすことと矛盾するものではなく、むしろ、空間限定の働きから進行を表わす働きをもつにいたった“在”の用法の変遷を裏付けるものであると言うことができよう[12]。“在”が事物の位置を表わす用法から動作が行なわれる範囲を限定する用法、さらには動作の進行を表わす用法へと発展していったことは、コムリー1988：159、161、162 が、ありかを表わす成分が進行を表わす働きを備えるにいたった例として英語の“to be in the process of doing something”、“to be in progress”やイタリア語の“stare(立っている)”を用いた進行表現とともに、中国語の“在(～にある)”を挙げていることとも符合する。また、島岡 1990：185 には、

(28) I **am** learn**ing** French.
／私はフランス語を学ん**デイル**。

の「学ん**デイル**」における「**イル**」は“be”と同様に「そういう状態にあること」すなわち「その行為の進行・継続」を表わす機能語の役割を果たしている旨の記述がみられ、日本語や英語における進行表現の形成過程と、中国語におけるそれとの間に共通

点が存在することがうかがわれる。“在”や「テイル」がアスペクトマーカーとして用いられる場合においても動詞としての語彙的意味をとどめていることは、讃井 1996 a：28 に、“在”が中国語話者の語感では、動作主体が発話時にある動作の過程もしくは状態の中に在ることを話し手が判断する意味の成分である旨の記述がみられることや[13]、寺村 1984：127 が「～テイル」のアスペクト的意味の中心的、一般的意味は、「既然の結果が現在存在していること」すなわち「あることが実現して、それが終わってしまわず、その結果が何らかの形で現在に存在している(残っている)」ことであり、動詞が本来時間的な幅をもつ動作・現象を表わすものである場合には、「その動作・現象が始まって、終わらずに今存在している」すなわち「開始の結果が今もある」という継続の意味をもつのが普通であるとしていることによっても理解できよう。同様のことは、英語の進行表現に用いられる“be”についてもあてはまり、前掲の“to be in the process of doing something”、“to be in progress”や、

(29) He **is**［**just in the act of**］study**ing**.
(大原 1973：23)

などに端的にあらわれている[14]。

以上のように、日本語の「テイル」、中国語の“在”、英語の“be”はいずれも空間表現を構成する成分としての性格を残しており、「(動作が進行中の段階に)ある」を表わすことによって進行表現を構成しているのである。このことは、動作の進行が、動作が行なわれるという事態が継続することである点において、状態性の強い「ある」という概念を表わす上記の諸成分との間に意味的な近似性を有することと表裏一体となっている[15]。同様のことは、フランス語の“être en train de＋不定詞”表現についてもあてはまると考えられる。この点については、島岡 1990：191 に挙げられている

(30) Il **est en train d**'écrire une lettre.
／He **is in the course of** writ**ing** (a letter).
※カッコ内は筆者

のような英語表現との対応例が参考となろう。周知のように、“être”は英語の“be”に相当する成分である一方、“train”は「連なっているもの」という意味特徴を有する点において空間的な性格を有するということができ、場所を示す働きのほか様態(or 状態)を示す働きをも有する“en”と組み合わされた“en train”の形で「～の最中だ」を表わすことが可能である[16]。これらのことは、『新スタンダード仏和辞典(“train”の項)』に、“train”が「列、縦列／(装置などの)連なり」のような空間的な概念を表わす一方で、“en train”が「活動(進行)状態」を表わす旨の記述が、久松 2011：155 に、“être en train de＋不定詞”は“train”の「連なっているもの」のイメージから「事柄の進行状態」、「事がはじまっている状態」を指す旨の記述がそれぞれみられることからも理解できよう。このように“être en train de”は、これを構成する諸成分がいずれも空間表現との間に深い関わりを有しており、空間表現を時間表現に転用した進行アスペクト形式であるとみてさしつかえない[17]。“être en train de＋不定詞”は、青木 1987：25 が「発話時点とは関わりなく、事柄の生起を確認し、そして、『継続的』なアスペクトとしてその事柄を限定する」としているようにアスペクト形式であって、時制は“être”に反映されて基準時点(通常は発話時、発話時以後)における動作を表わすことが可能である[18]。これらの点において、非アスペクト表現である現在形を用いた表現が発話時に進行中の動作を表わす働きに限定されるのとは異なる。

ところで、日本語の「テイルトコロダ」に対しては、“être en train de＋不定詞”の場合と同様に、過去の特定時点において動作が進行中であったことを表わす「テイルトコロダッタ」あるいは「テイタトコロダ」が存在するのに対し、中国語の進行アスペクト形式“在(V)”には時制が反映されない[19]。周知のように中国語においては、時制は動詞ではなく

(31) 他**现在**在吃药。
(彼は今薬を飲んでいます。)(船田 2003：141)
(32) **昨天晚上**我在看小说。
(昨晩私は小説を読んでいました。)
(≪實用英語語法≫：115)
※カッコ内日本語は筆者

における“現在”、“昨天晚上”のような時を表わす成分によって示される。但し、王学群 2002：79 の記述にみられるように、“在(V)”表現は、事件時を基準時とする

(33) **明天**你来的时候，我也许**在**上课。
(明日あなたが来る頃には、私は授業に出ているかも知れません) ※カッコ内日本語は筆者

のようなケースでない限り未来時のコトガラを表わすのに用いることは難しく、この点においては発話時、発話時以後における動作を表わすのが通例である“être en train de＋不定詞”表現との間に共通点を有するということができる[20]。

2.2 進行と持続

現在形を用いた進行表現と“être en train de＋不定詞”表現との間には、青木 1987：20 の記述にみられるように文脈によっては知的意味の上で大きな相違はみられないケースがあり、両者の相違についてはテキストにおいて説明されることが少ないようである。しかし、形式が異なる以上は、両者の間に何らかの相違が存在するとみるのが自然である。例えば、

(34) Allô! Yoko? Bonjour! Pourrais-je parler à Marion,s'il te plait?
— Ah, elle **prend** sa douche.

(34)' Allô! Yoko? Bonjour! Pourrais-je parler à Marion,s'il te plait?
— Ah, elle **est en train de** prendre sa douche.
(もしもし、洋子？　マリオンと話したいんだけど。— 彼女、今シャワーを浴びてるの。)
(藤田／清藤 2002：86)

の両者を比較した場合、(34)'の“elle **est en train de** prendre sa douche”は「今まさにシャワーを浴びている」ことを表わす[21]のに対し、(34)の“elle **prend** sa douche”は、シャワーを浴びるために衣服を脱いでいたり、シャワーを浴び終わって衣服を着たり髪を乾かしている場合に用いることも可能であるという相違がみられる。このことは、“train”が「空間的に連なっているもの→時間的に連続したもの」という意味特徴を有することと無関係ではないと考えられ[22]、“être en train de＋不定詞”は発話時においてまさに行なわれている最中であることを表現するのである。(34)、(34)'間にみられる上記の相違は、現在形を用いた表現が“être en train de＋不定詞”表現とは異なって、習慣的行為のような長期にわたって断続的に行なわれる動作を表わす働きを有することや、例えば

(35) Qu'est-ce que vous faites？

が、発話時においてまさに進行中の動作についてたずねる用法に限定される

(36) Qu'est-ce que tu **es en train de** faire?
((今)何をしているの？)　　(久松 2002：88)

の場合とは異なって

(37) Qu'est-ce que vous faites (dans la vie)?
— Je suis étudiant(e).
(お仕事は何をなさっていますか。—私は学生です。)　　(中村 2001：48)

のように職業・身分をたずねる表現として用いることも可能であることとも関わっており、断続を許容する現在形と、許容しない“être en train de＋不定詞”との相違に起因すると考えられる。青木 1987：20、25 には、“être en train de＋不定詞”表現において問題となるコトガラは常に特定的な occurrence であり、「食後にたばこを吸うのが習慣である」という場合に

(38) Pierre fume après le repas.
(ピエールは食後にタバコを吸う。)
※カッコ内日本語は筆者

は可能であるのに対し、

(38)' *Pierre **est en train de** fumer après le repas.

が非文となるのは、“être en train de＋不定詞”が現在における一回のコトガラを問題とする点において現在形とは異なることによる旨の記述がみられる[23]。(38)は習慣的な動作を表わす表現であり[24]、長期にわたって断続的に行なわれる動作であるという点においては、例えば

(39) J'apprends à conduire.

(私は運転を習っている。)　(中村 2001：10)

(40) Maintenant，il travaille à Paris.

(いま、彼はパリで働いています。)

(久松 2011：154)

(41) Où est-ce que vous achetez votre pain?

(パンはどこで買っていますか？)

(500 語：219)

などと同様である[25]。(38)～(41)が表わす動作は長期にわたる断続的なものであり、いずれも発話時に行なわれているか否かが問題とはされていない点において(34)の場合と同様である。このように、現在形を用いた表現が表わす動作は具体的な個別のものには限られない点において、“être en train de＋不定詞”表現が表わす動作が青木の指摘するように一回の事柄、すなわち具体的な個別の動作であるのとは異なるのである。

ところで、(34)、(34)'のような現在形による表現と“être en train de＋不定詞”表現との間におけるような相違は、中国語の“在(V)”、“(V)着”を用いた表現の間にもみられる。このことは、陈月明 2000：542-543 に、(「歯を磨いている」を表わす)“在刷牙”は“活动(activity)的进行＝活動の進行”であって“不一定是一个匀质的情状(等質の状況とは限らない)”であるのに対し、“刷着牙”は“动作(action)的持续＝動作の持続”であって“一个匀质连续反复的情状(連続・反復する等質の状況)”である旨の記述がみられることや、王学群 2001：73-74、同 2002：83-84 に、

(42) 有的在给房东挑水，有的正在打扫院子，有的正在帮着乡亲们推碾子，碾子上铺着刚刚收下的金灿灿的谷子。(≪轮椅上的梦≫)

は水を汲むためにバケツを持って井戸／川へ向かっている場面、水を井戸／川から汲んでいる場面、水を運んでいる場面、汲んできた水を水がめに入れている場面のいずれを表わすことも可能であるのに対し、“有的在给房东挑水(ある者は家主のために水をにない運んでいる)”を“有的给房东挑着水”に置き換えると水を運んでいる場面を表わすにとどまる、すなわち“在Ｖ”表現が表わすコトガラにはいくつかの非均質的な段階がありえるのに対し、“Ｖ着”表現が表わすコトガラは均質的な一段階に限られる旨の記述がみられる[26]ことによっても理解できよう。山田 1984：117、119 には、「進行」という概念が徐々の変化を含意する点において「持続」とは異なる旨の記述がみられる。この概念規定によれば、“在Ｖ”は動作の進行を、“Ｖ着”は動作の持続を表わす形式であることとなる[27]。「持続」なる概念が「連続して切れ目がない」という意味特徴を含んでいることは言うまでもなく、神田 1989：28 の記述からもみてとれるように「進行」の概念と区別しがたい側面を有することは否定できない。しかし“Ｖ着”は、讃井 2000：59 の記述にみられるように「動作が実現し一定時間持続する」ことを表わす働きを有する一方、例えば

(43) 他拿着手机。

(彼は手に携帯電話を持っています。)

(船田 2003：146)

のような動きをともなわない動作を表わす表現や、

(44) 她穿着一双皮靴。

(彼女はブーツをはいています。)

(船田 2003：147)

のような動作結果の持続状態を表わす表現、さらには

(45) 墙上挂着一张美丽的画儿。

(壁に美しい絵がかけてある)

(讃井 1996ｂ：57)

のようないわゆる存在表現に用いることも可能である。これらのことから、“Ｖ着”は「持続」という意味的な特徴を有する連続した一つの領域を形成しつつも、動作の持続状態を表わす成分としての性格が強いものから、動作結果の持続状態を表わす成分としての性格が強いもの、さらには存在表現を構成するものまでが階層的に存在することがうかがわれる。(44)、(45)においては動作がすでに終了しているため、コトガラは動作の一過程として位置づけられるものではなく、時間の流れとは直接的な関わりを有しないこととなる。また、(45)における“挂着”は、「誰かがそうしている」ではなく「そうなっている」を表わす成分とみることが可能であり、表現全体は“墙上(壁)”という空間における“画儿(絵)”の存在のありよう(＝かけられた状態で存在する)を表わす非

動作表現である[28]。時間の流れと直接的な関わりを有しないコトガラを表わす点においては、動作の持続を表わす“Ｖ着”表現の場合も同様であり、“Ｖ着”が表わす概念は「動作の持続状態」、すなわち、動作が開始された後に存在する動作のあり方そのものであって、動作によって生じた状態である点においては動作結果の持続状態と同様である[29]ため、開始と終了との間に位置する動作の一過程であり時間の流れと直接的な関わりを有する「進行」とは異なるのである[30]。従って、動作の持続を表わす“-着”をアスペクトマーカーであると断定することは説得力に欠けるといわざるを得ない。

動作が持続していることを前提とする“Ｖ着”は、讃井 1996ａ：31 の記述にみられるように、断続的に継続する動作の場合には用いることができない。これに対し“在Ｖ”の場合には、動作が持続していることは必要条件ではなく、宮田 1996：21 が指摘するように、長期にわたって動作が継続進行することを表わすのに用いることが可能であり、例えば

(46) 去年夏天他们**在**修建一座发电站。
(去年の夏彼らは発電所を建造していた。)
(≪實用英語語法≫:115)
※カッコ内日本語は筆者

のような表現が成立することとなる[31]。中国語においては、進行を表わす働き、持続を表わす働きがそれぞれ“在(Ｖ)”、“(Ｖ)着”という別個の成分によってになわれる一方で、

(47) 我**在**写**着**字。
(私は字を書いている。) (大原 1973：23)
※カッコ内日本語は筆者

(48) 我(正)**在**给他写**(着)**信(呢)。
(今、彼に手紙を書いています。)
(陳淑梅 1997：23)

のように両者が併用されるケースが存在するのも、両者の間に相補的な役割分担が存在するためと考えられよう[32]。

一方、前述したように、フランス語の“être en train de＋不定詞”は進行アスペクトの形式であると同時に、「連なっているもの」という意味特徴を有する“train”を含んでいるため、動作が連続して行なわれている最中であることを表わすと考えられる。このように“être en train de＋不定詞”は、アスペクト形式である点においては中国語の“在Ｖ”との間に共通点を有する一方、動作が連続していることを前提とする点においては、動作の持続を前提とする中国語の“Ｖ着”との間に相似点を有するということができる[33]。

ところで、「テイルトコロダ」は、2.1 で述べたように空間表現を時間表現に転用して動作の進行を表わすにいたった表現形式であると同時に、青木 2000：93 が「現在の状況あるいは場面を特定的に説明している」としていることからもみてとれるように、発話時点においてまさに進行中の動作を表わすものであり、この点において“être en train de＋不定詞”との間に共通点を有するということができる。これに対し、「テイル」は必ずしも発話時において動作が進行中であることを必要条件とはせず、動詞の現在形を用いたフランス語表現の場合と同様に動作の断続を許容し、長期にわたって断続的に行なわれる動作を表わすことも可能である。2.1 で紹介したように、「テイル」が動作の進行を表わす場合には「動作が始まって、終わらずに今存在している」ことを表わす。「テイル」が有するこのような特徴は、寺村 1984：129 が

(49) 私はこの頃毎日 10 キロ走っ**テイル**。
(寺村 1984：128)

(50) 父はこの頃６時前に起き**テイル**。
(同上：129)

のような習慣を表わす用法について、「やはり～テイルの基本的な意味によって説明されるだろう」、「～テイルが表わしている現在の習慣というのは、発話時以前のあるときに始まって、それが発話時に終わらずにつづいている(が、いずれ終わる)というふうに理解される習慣である」としているように、習慣的な動作を表わすケースについてもあてはまる。この点において、動詞の現在形を用いたフランス語表現、“在Ｖ”を用いた中国語表現が、それぞれ非連続、非持続を許容しない“être en train de＋不定詞”表現、“Ｖ着”表現という別個の表現手段と並存しつつ、非連続、非持続を許容することによって断続的な動作を表わす働きをになっているのとは異なるのである。

2.3 「テイル(トコロダ)」表現が対応しない“être en

train de＋不定詞”

入門・初級のテキストにおいては、“être en train de＋不定詞”に対応する日本語表現として「Vテイル」あるいは「Vテイルトコロダ」が挙げられるのが通例である。これらはいずれも進行中の動作を表わすのに用いられる形式であり、“être en train de＋不定詞”との間に2.1、2.2で述べたような共通点を有するため、対応関係の成立そのものに疑問をさしはさむ余地はないものの、例えば

(51) Il **est en train de** partir.
(『クラウン仏和辞典(“train”の項)』)
(51)’彼はちょうど出かけ**ルトコロダ**。(同上)
(＝出かけ**ヨウトシテイルトコロダ**。)
※カッコ内は筆者

(52) Le gâteau **est en train de** cuire.
(『ロベール・クレ仏和辞典(“train”の項)』)
(52)’ケーキが焼き上が**ルトコロダ**。(同上)

(53) Cette ville est en danger : elle **est en train de** mourir. (古石 1999 : 86)
(53)’この町は危険にさらされています。死に**カカッテイル**のです。 (同上 : 89)

(54) Attention ! il y a ton mouchoir qui **est en train de** tomber. (小熊 1993 : 143)
(54)’あっ、ハンカチが**落ちる**よ。 (同上 : 145)

(55) Les tartes **sont en train de** cuire.
(『新スタンダード仏和辞典(“train”の項)』)
(55)’パイは焼け**ツツアル**。 (同上)

(56) L’opinion publique **est en train d’**évoluer.
(『小学館ロベール仏和大辞典(“train”の項)』)
(56)’世論の動向は変わり**ツツアル**。 (同上)

のような「テイル(トコロダ)」以外の日本語成分が対応するケースが存在するのもまた事実である[34]。“être en train de＋不定詞”の用例として、『クラウン仏和辞典(“train”の項)』は(51)と

(57) Il **est en train de** travailler.
彼は仕事中である。(＝仕事をし**テイルトコロダ**。)
※カッコ内は筆者

を、『ロベール・クレ仏和辞典(“train”の項)』は(52)と

(58) Elle **est en train de** travailler.
彼女は仕事〔勉強〕の最中だ。(＝仕事〔勉強〕をし**テイルトコロダ**。)
※カッコ内は筆者

を、『小学館ロベール仏和大辞典(“train”の項)』は(56)と

(59) Il **est en train de** lire.
彼は読書の最中です。(＝読書をし**テイルトコロダ**。)
※カッコ内は筆者

をそれぞれ同列にあつかっているため、“être en train de＋不定詞”が表わす「進行」の概念については、これらの点をも視野に入れた規定が必要である。現在形を用いた進行表現は、1.1、1.2で述べたように、継続可能な動作動詞が用いられた場合に成立し、“être en train de＋不定詞”との使い分けが問題となるのもこのケースである。これに対し、(51)’～(56)’の「出かける」、「焼き上がる」、「死ぬ」、「落ちる」、「焼ける」、「変わる」に「テイル」を付加した「出かけ**テイル**」、「焼き上がっ**テイル**」、「死ん**デイル**」、「落ち**テイル**」、「焼け**テイル**」、「変わっ**テイル**」はいずれも進行ではなく動作が完了した後の状態を表わすこととなる[35]。いずれにしても、(51)～(56)における“être en train de＋不定詞”の用法は、「Vテイル(トコロダ)」のそれを越えた領域であり、進行中の動作として表現可能なコトガラの範囲が異なることを示しているため、日本語話者がフランス語進行表現を運用する際に留意しなければならない点である[36]。

(51)’、(52)’における「出かけ**ルトコロダ**」、「焼き上が**ルトコロダ**」のような「ルトコロダ」表現は、動作が行なわれる直前であることを表わす。このことは、(51)’の「出かけ**ルトコロダ**」が「出かけ**ヨウトシテイルトコロダ**」に置き換えられることによっても容易に理解できよう。動作が行なわれる直前であることを表わす点においては、(53)’における「死に**カカッテイル**」のような「カカッテイル」表現や、(54)’における「**落ちる**よ」のような動詞の終止形を用いた表現も同様であり、いずれの表現が表わすコトガラにおいても、発話時において動作は実現前の

段階にある[37]。一方、(55)'、(56)'における「焼け**ツツアル**」、「変わり**ツツアル**」は、「焼ける」、「変わる」という事態がすでに始まっており、引き続き変化を続けていくことを表わしている。「ツツアル」は、金田一 1976 a：56 において「テイル」、「テイルトコロダ」とともに進行態を表わす形式に分類されているが、鈴木 1972：390 の記述にみられるように結果動詞と組み合わされることも可能であり、その場合にはその動詞の示す結果に向かって事態が少しずつ進行している過程にあることを表わす。また、(52)'～(56)'はいずれも無情物について述べた表現であり、主体の意志による動作を表わすものではない。とりわけ(53)'の「カカッテイル」は、森田 1989：292 に、「カカル」は意志動詞に付加されても特に意志でコントロールできる状態ではなく「偶然に」の意識を含む成分である旨の記述がみられるように、意志動詞を無意志化する働きを有する点において「テイルトコロダ」とは対照的である。「テイルトコロダ」は、小熊 1993：142-143 に、話者のコントロールの外に位置するコトガラ(自然現象や感情に関わる動作など)を表わす場合には用いることができない旨の記述がみられることや、青木 2000:98 が「テイルトコロダ」の働きについて「目的志向の行為に関する現在の状態の規定である」としていることからもみてとれるように、意志的な動作を表わす形式としての性格が強い。上記のような特徴を有する(52)'～(56)'に対して(52)～(56)が成立することや、小熊 1993:144 が、進行中の動作が話者にとって〈(ネガティヴな)結果〉に向かっている場合には「テイルトコロダ」による表現が不適切であると推論していることからは、“être en train de＋不定詞”が「テイルトコロダ」に比べて意志的な動作を表わす形式としての性格が弱いことがみてとれよう。

以上のように、“être en train de＋不定詞”は、継続可能な動作を表わす動詞と組み合わされて進行中の動作を表わすにとどまらず、動作が行なわれる直前の段階を表わす働きや、継続性をもたない結果動詞と組み合わされて進行を表わす働きを有する点、意志的な動作を表わす性格の強弱の点において「テイル(トコロダ)」とは異なっており、それぞれの形式によって表現することの可能な「進行」の範囲は一致していない。このことは、青木 1987：27 が

(60) Le Pape **est en train de** quitter la France.
(教皇はフランスを離れようとしている。)
※カッコ内日本語は筆者

(61) Le gouvernement **est en train de** se transformer. (政府は変わりつつある。)
※カッコ内日本語は筆者

は「状態変化への進行」を表わし、これらの表現においては主体の意志性が問題とならないとしていることによっても理解されよう。また、1.1、1.2 で述べたように、動詞の現在形を用いた進行表現と“être en train de＋不定詞”表現が並立するのは、動詞が継続可能な動作を表わすものである場合に限られ、前者は動作が発話時に進行中であることを話者が認めることによって成立するため、後者が動作の行なわれる直前段階を表わすケースや、継続性をもたない結果動詞と組み合わされて進行を表わすケースにおいて両者の使い分けが問題とはならないことは言うまでもない。

3　おわりに

以上、フランス語進行表現のうち、動詞の現在形を用いた表現、“être en train de＋不定詞”表現について、中国語・日本語の進行表現との対照を通して考察を行なった。フランス語において動作の進行を表わす方法としては、現在形を用いた表現によるムード的手段と“être en train de＋不定詞”形式を用いるアスペクト的手段が並存し、使い分けがなされている。本稿においては、両者の特徴と中国語・日本語の進行表現を構成する諸成分・手段との間に存在する共通点・相似点や相違点を明らかにするとともに、進行表現を形成する過程において観察される各言語固有の特徴についても分析を行なった。但し、紙幅の制約から本稿では記述できなかった内容がある。すなわち、アスペクト形式であると同時にムード性を帯びている“être en train de＋不定詞”について中国語や日本語の諸成分との比較検討を行なうことや、過去において進行中の動作を表わすことが可能なフランス語動詞のいわゆる半過去形についての考察である。これらについては次稿にゆだねることとする。

注

1)　『フランス文法大全』: 253-254 は、「進展相」を動作がその強度において進展ないし後退する意味を示すことであるとして、“Le mal va croissant.（病気は段々悪くなる。)”などを挙げている。『現代フランス広文典』: 230 も同様に、進行相の例として“La situation va en s'－améliorant.(状況はしだいによくなっている。)”、“Il court, Il court.(彼は走る、走る。)”を挙げている。「継続相」、「進行相」については、さらに島岡 1999:593-594、596-599、621-624 を参照。ちなみに、『オックスフォード 言語学辞典(「継続相」、「進行形」、「相」の項)』には、いわゆる「進行相」が「継続相」の下位概念である旨の記述がみられる。

2)　『新フランス文法事典(“présent de l'indicatif〔直説法現在形〕”の項)』は現在形の働きを、「現在時」を表わすこと、「過去・未来」を表わすことに大別し、進行中の動作を表わす働きを前者の一種である「継続的現在(présent linéaire)」の一パターンと位置づけている。現在形の働きについては、さらに島岡 1999：595 を参照。ちなみに青木 1989：307 には、現在形は「主格が事態に関わること」のみを表わす、いわば「人称を担った不定法」である旨の記述がみられる。

3)　この点については、英語表現と比較した久松 1999：27、同 2002：20 を参照。

4)　この点については輿水 1985：293、成戸 2009：303 を参照。“呢”を用いないで進行中の動作を表わすケースとしては、例えば“你(在)喝什么酒？(何を飲んでるの？)(讃井 2000：54)”が挙げられる。一方、宮田 1996：20 には、“她看孩子。”、“孩子吃奶。”は“每天下午她看孩子。(毎日午後、彼女は子どものもりをしています。)”、“现在孩子吃奶。(いまから子どもは乳を飲みます。)”のように、普段そうしていることやこれからそうすることを表わすのに用いられるのに対し、動作が進行中であることを表わす場合には、“她看孩子**呢**。”、“孩子吃奶**呢**。”のように“呢”が用いられる旨の記述がみられる。

5)　“呢”のこのような働きについては、さらに神田 1989：29-30、讃井 1996 a：28、陳淑梅 1997：30-32、讃井 2000：61、古川 2001：155 を参照。木村 2012：143-146 の記述も、考え方の方向性においては同様であると考えられる。

6)　森 2000：269 は、進行や持続は未完了の状態であり、その状態は早晩終わりになるという予測をともなっているとした上で、“呢”の特徴を「動作や状態が目下進行中である(その含みとして早晩そうではなくなる)」と話者が認めるムードを表現するとしている。この点についてはさらに『現代中国語総説』: 351 を参照。

7)　青木 1987：26 は、瞬間相の述語を用いた“Il vient.”、“Il **est en train de** venir.”では表現価値が異なるとしている。

8)　金田一 1976 b：12 は、継続動詞の終止形の用法として「近い未来に起る事実」、「現在の習慣」を挙げている。「テイル」がいわゆる継続動詞と組み合わされて動作の進行を表わす点については、金田一 1976 b：8、森山 1987：55 を参照。青木 1989：308 には、日本語動詞の終止形を用いた表現の場合には、事態の成立は(話し手ではなく)主体によって確認されるのであり、話し手は発話時において事態の成立を確認する役目をになっていない点においてフランス語動詞の現在形を用いた表現の場合とは異なり、話し手が行なうのは、すでに確認された事態をとり上げ、「予定」として相手に報告することにとどまる旨の記述がみられる。

9)　これらの点については成戸 2009：309-310 を参照。なお、ここでいう「時間」とは「空間」に対する概念であり、いわゆる「時制(tense)」ではない。「トコロ」のもつ空間的用法と時間的用法との関わりについては、定延 1999：24-26 を参照。

10)　“在”の働きにみられるこのような連続性については、成戸 2009：296-329 を参照。

11)　この点については王学群 2002：78 を参照。同形式をとる表現は、例えば“他**现在**在教室上课。”のように発話時であることを明示する成分を含んだ表現か、“他在里屋看书**呢**。”のような“呢”を含んだ表現、あるいは“他正在里屋看书。”のようにコトガラを「ある一時点に位置する動作」として表現する“正”を含んだ表現とすれば、進行中の動作を表わすことがより明確となる。これらの点については、さらに讃井 1996 a：31、宮田 1996：20、成戸 2009：302-304 を参照。

12)　この点については成戸 2009：296-297 を参照。大原 1973：23 には“他正**在那儿**看着报呢。／He **is** read**ing** a newspaper.”のような英語表現との対応例が挙げられており、“在那儿”の概念が空間的なものから時間的なものへと変化していることがみてとれる。

13)　潘文娱 1980:44-45 には、“在”の本来の意味は「残っていること」であり、副詞(アスペクトマーカー)として用いられる場合には動作が残っていること(“存留”)、すなわち動作が持続あるいは進行中であることを表わす旨の記述がみられる。

14)　(29)は、大原 1973：23 において“他**正在**念书**呢**。”に対応する英語表現として挙げられている。ちなみに船田 2003：141 は、“正在”の英訳には“at the moment”とともに“in the middle of…”が使われることがあるとしている。

15)　益岡 1993：61 には、「幸司は今音楽を聴い**テイル**。」、「孝子は先週から神戸に来**テイル**。」がいずれも広い意味での現在の状態を表わすのは、状態動詞を代表する「**イル**」の性質のためである旨の記述がみられる。ちなみに砂川 2000：105-117 には、空間表現が時間概念を表わすにいたる過程において連続性が存在する点についての指摘がみられる。

16)　『ディコ仏和辞典(“en”の項)』は、“en”の用法として場所を示すことのほか、様態(…(の状態)に〔で〕)を表わすことを挙げている。

17)　『新フランス文法事典(“train”の項)』、『フランス文法集成』: 491 には“être en train de”をアスペクトの助動詞とする見解が存在する旨の記述がみられる。これに対し、『フランス文法大全』: 252 は「助動詞的に用いられる動詞句」とする。

18)　“être en train de＋不定詞”における“être”は、“Il **sera en train de** chanter.（青木 1987：25)”のように未来形であるケースも存在するものの、『フランス文法集成』: 491、『新フランス文法事典(“train”の項)』にみられるように現在形または半過去形であるのが通例

とされる。この点については、さらに『フランス語ハンドブック』: 312 を参照。ちなみに、話者が動作を言語化するにあたって基準とする特定時点を表わす用語としては、“être en train de”について述べた青木 1987：26、“-着”について述べた村松 1988ａ：58、同 1988ｂ：78、「テイル(ル／タ)トコロダ」について述べた青木 2000：93、「シツツアル、シテイル、シテアル」について述べた副島 2007：61 の「基準時点」のほか、“être en train de”について述べた小熊 1933：139 の「基準点」、“在(V)”、“(V)着”について述べた王学群 2002：79 の「基準時」などが挙げられる。

19) この点については大原 1973：23 を参照。

20) 注 18 を参照。未来時のコトガラを表わす英語表現“I shall **be** work**ing**.”に対応する中国語表現として≪英汉语比较语法≫:67 に挙げられている“我将**正在**工作**着**。”は、自然な表現であるとは言いがたい。

21) 久松 2011：155 は、“être en train de＋不定詞”に相当する内容を表わす成分として“être actuellemet occupé(e) à＋不定詞”を挙げている。

22) “être à＋不定詞”、“être après à＋不定詞”などは、「連続」とは異なる意味特徴を有する成分により形成された進行アスペクト形式であると推察される。

23) 青木 1987：23 には、“Pierre travaille chez Renault.”における“travailler”は一つの occurrence ではなく、“travailleur”という「範疇」を構成するのに充分な classe d'occurrences 全体が問題となっている点において(4)の場合とは異なる旨の記述がみられる。

24) 小熊 1993：139-140 は、“Il écrit une lettre.”、“Il **est en train d'**écrire une lettre.”はいずれも「手紙を書いている」ことを表わす表現としてほぼ同一意味の表現である一方、前者に“tous les jours”などを付け加えれば「習慣」も表わしうるとしている。

25) ちなみに、長期にわたる断続的な動作を表わすフランス語表現に対しては、“Il apprend à conduire. ／He **is** learn**ing** how to drive. (久松 1999：85)”のような進行形を用いた英語表現を対応させるケースのほか、“J'apprends l'anglais. ／I **study** English. (藤田／清藤 2002：46)”のような進行形を用いない表現を対応させるケースがみられる。文化庁 1975：134 には、「私は今Ｋ大学へ行っ**テイル**。」、「鴨川は京都の市内を流れ**テイル**。」のような、あることがかなりの幅の時間内にひきつづき起こっている場合には、英語では単に現在形が使われることが多い旨の記述がみられる。

26) 同様の記述が肖奚强 2002:30、彭飛 2007：302-303 にもみられる。この点については、さらに村松 1988ｂ：82-84、讃井 1996ａ：31 を参照。

27) “在(V)”が表わす「進行」、“(V)着”が表わす「持続」の概念規定については、輿水 1985：185、呉大綱 1988：107、成戸 2009：332-333 を参照。

28) 動作結果の持続状態を表わす“Ｖ着”表現については宮田 1996：21-22 を参照。(45)のような存在表現の特徴については成戸 2009：199-204、252-259 を参照。

29) 成戸 2009：337-340 においては、“-着”が有する動作の持続状態を表わす働き、動作結果の持続状態を表わす働きの間に連続性がみられる点について考察を行なった。(43)と(44)の間にも同様の連続性がみられる。

30) 成戸 2009：332-333 を参照。このことは、≪外国人学汉语难点释疑≫:167-168 に、“他**在**穿大衣。”のような“在Ｖ”表現は“动作(action)”を、“他穿**着**大衣。”のような“Ｖ着”表現は“状态(state)”を表わす旨の記述がみられることとも符合する。神田 1989：28-29 の記述にみられるように、同一のコトガラであっても、動作の進行として表現する場合には“在Ｖ”が、持続として表現する場合には“Ｖ着”が用いられる。

31) 同様のことは“在・N(空間)＋Ｖ”についてもあてはまり、“那时候她**在**一间医院里工作。(≪實用英語語法≫:113)”のような表現例が挙げられる。この形式が表わす進行は、動作自体が必ずしも発話時に行なわれているとは限らないという点において、長期にわたり継続して行なわれる動作と共通している。この点については成戸 2009：339-340、349 を参照。

32) 進行を表わす“在”、持続を表わす“-着”の役割分担については、神田 1989：28-29、31 を参照。

33) 進行表現を形成する中国語諸成分と英語の“be…ing”形式との間にもこのような錯綜した対応関係が存在することは、大原 1973：23、≪英汉语比较语法≫:65-68 の記述から推察される。

34) 『クラウン仏和辞典(“train”の項)』、『小学館ロベール仏和大辞典(“train”の項)』は、“être en train de＋不定詞”に対応する日本語成分として「マサニ～シカカッテイル」、「～シツツアル」を挙げている。

35) この点については、金田一 1976ａ：39、42、同 1976ｂ：8 を参照。但し、寺村 1984：130-131 の記述にみられるように、「死ん**デイル**」は「アフリカでは、毎日数万の人が食料不足のために死ん**デイル**。」のように、動き、変化に関わるものが複数の場合には、瞬間動詞の「テイル」形によって継続(本稿でいう「進行」)を表わすことが可能である。

36) ちなみに、(51)'、(52)'のような「(ヨウトシテイ)ルトコロダ」表現に対しては“être en train de＋不定詞”表現のほか、例えば“Il **est sur le point de** partir. ／彼は出かけ**ヨウトシテイルトコロダ**(＝出かけ**ルトコロダ**)。(『コンサイス和仏辞典(「ところ」の項)』、カッコ内は筆者)”のような“être sur le point de＋不定詞”表現が対応するケースが存在するため、両者の使い分けについての知識が必要である。「ルトコロダ」と“être sur le point de”との対応については小熊 1993：154 に指摘がみられる。この形式における“point”の用法も空間表現から時間表現への転用の結果であると推察され、(12)のような“正”を用いた中国語表現との対応関係について考察の余地が認められよう。

37) 動作が行なわれる直前であることを表わす「ルトコロダ」の働きについては、鈴木 1972：391、森田 1989：796、楠本 2000：80、小林 2001：20 を、終止形については注 8 を参照。小熊 1993：150 は、“être en train de sortir”は「出**ヨウトシテイルトコロダ**」という内容を表わすとしている。また、森田 1989：292 は、相手(の存在)を前提としない動詞に「カカル」がつくと「そのような動作や状態にすこし移る」ことの意味となり、「まさにその動作や状態に入りそうになる。今にもそうしそ

う、そうなりそうになる」状態であるとしている。

参考文献

青木三郎 1987.「現代仏語のアスペクト・テンス・モダリティー―“être en train de＋infinitif”と現在形について―」，日本フランス語学研究会『フランス語学研究』第 21 号，20-35 頁。

青木三郎 1989.「文法の対照的研究―フランス語と日本語―」，山口佳紀編集『講座 日本語と日本語教育 第 5 巻 日本語の文法・文体(下)』，明治書院，291-311 頁。

青木三郎 2000.「＜ところ＞の文法化」，青木三郎／竹沢幸一編『空間表現と文法』，くろしお出版，77-103 頁。

朝倉季雄『新フランス文法事典』，白水社(2002)。

朝倉季雄『フランス文法集成』，白水社(2005)。

王学群 2001.「地の文における“Ｖ着(zhe)”のふるまいについて」，『日中言語対照研究論集』第 3 号，日中言語対照研究会(白帝社)，60-80 頁。

王学群 2002.「会話文における“Ｖ着(zhe)”と“在…Ｖ”のふるまいについて」，『日中言語対照研究論集』第 4 号，日中言語対照研究会(白帝社)，72-90 頁。

大槻鉄男／佐々木康之／多田道太郎／西川長夫／山田稔編『クラウン仏和辞典(第 2 版)』，三省堂(1984)。

大原信一 1973.『中国語と英語』，光生館(再版 1978)。

小熊和郎 1993.「トコロダと aller, venir de, être en train de＋infinitif―アスペクトとモダリティーの関連を巡って―」，『西南学院大学フランス語フランス文学論集』第 29 号，139-175 頁。

神田千冬 1989.「進行・持続表現における“在”と“着”の機能分化傾向について」，『中国語』1989 年 8 月号，大修館書店，28-31 頁。

木村秀樹 2012.『中国語文法の意味とかたち―「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究―』，白帝社。

金田一春彦 1976ａ.「日本語動詞のテンスとアスペクト」，金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』，むぎ書房(1976)，27-62 頁。

金田一春彦 1976ｂ.「国語動詞の一分類」，金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』，むぎ書房(1976)，5-26 頁。

楠本徹也 2000.「トコロの意味と機能に関する一考察」，『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 26 号，東京外国語大学留学生日本語教育センター，77-87 頁。

呉大綱 1988.「現代中国語動詞のテンス・アスペクト―日本語との比較―」，『日本文学論集』第 12 号，大東文化大学，107-119 頁。

輿水優 1985.『中国語の語法の話―中国語文法概論』，光生館。

小林幸江 2001.「『ところだ』の意味と用法」，『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』第 27 号，東京外国語大学留学生日本語教育センター，17-31 頁。

(財)フランス語教育振興協会編『CD・イラストで覚える フランス語基本 500 語』，朝日出版社(1998)。(略称 500 語)

砂川有里子 2000.「空間から時間へのメタファー―日本語の動詞と名詞の文法化―」，青木三郎／竹沢幸一編『空間表現と文法』，くろしお出版，105-142 頁。

定延利之 1999.「空間と時間の関係―『空間的分布を表す時間語彙』をめぐって」，『日本語学』8 月号，明治書院，24-34 頁。

佐藤康 2005.『フランス語のしくみ』，白水社。

讃井唯允 1996ａ.「語気助詞“呢”・時間副詞“在”およびアスペクト助詞“着”」，『中国語』1996 年 6 月号，内山書店，28-31 頁。

讃井唯允 1996ｂ.「アスペクトとテンス」，『中国語』1996 年 4 月号，内山書店，56-59 頁。

讃井唯允 2000.「“在等”“等着”“在等着”―“在”と“着”の文法的意味と語用論」，東京都立大学人文学部『人文学報』第 311 号，53-73 頁。

重信常喜／島田昌治／橋口守人／須藤哲生／工藤進／山岡捷利／ガブリエル・メランベルジェ編『コンサイス和仏辞典(第 3 版)』，三省堂(2003)。

島岡茂 1990.『英仏比較文法』，大学書林。

島岡茂 1999.『フランス語統辞論』，大学書林。

『小学館ロベール仏和大辞典』，小学館(1988)。

鈴木重幸 1972.『日本語文法・形態論』，むぎ書房。

鈴木信太郎／中平解ほか 1991.『新スタンダード仏和辞典』，大修館書店。

副島健作 2007.『日本語のアスペクト体系の研究』，ひつじ書房。

竹沢幸一 1991.「受動文、能格文、分離不可能所有構文と『ている』の解釈」，仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』，くろしお出版，59-81 頁。

田辺貞之助 2007.『フランス文法大全』，白水社。

中條屋進／丸山義博／G. メランベルジェ／吉川一義編集『ディコ仏和辞典』，白水社(2003)。

陳淑梅 1997.「『～テイル』の中国語訳についての一考察」，『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化コミュニケーション』第 19 号，23-33 頁。

寺村秀夫 1984.『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』，くろしお出版。

寺村秀夫 1992.「『トコロ』の意味と機能」，『寺村秀夫論文集 Ⅰ―日本語文法編―』，くろしお出版，321-336 頁。

中右実 1980.「テンス、アスペクトの比較」，國廣哲彌編集『日英語比較講座 第２巻 文法』，大修館書店(3 版 1982)，101-155 頁。

中川正之 1990.「中国語と日本語―場所表現をめぐって―」，近藤達夫編集『講座 日本語と日本語教育 第 12 巻 言語学要説(下)』，明治書院，219-240 頁。

中村敦子 2001.『音読仏単語1 日常生活編』，第三書房。

成戸浩嗣 2009.『トコロ(空間)表現をめぐる日中対照研究』，好文出版。

新倉俊一／朝比奈誼／稲生永／井村順一／冨永明夫／宮原信／山本顕一 1996.『改訂版フランス語ハンドブック』，白水社。

西村牧夫／鳥居正文／中井珠子／飯田良子／曽我祐典／菊地歌子／井本秀剛／増田一夫編訳『ロベール・クレ仏和辞典』，駿河台出版社(2011)。

バーナード・コムリー著／山田小枝訳 1988.『アスペクト』，むぎ書房。

Peter Hugoe Matthews 著／中島平三・瀬田幸人監訳『オックスフォード 言語学辞典』，朝倉書店(2009)。

髭郁彦／川島浩一郎／渡邊淳也編著『フランス語学小事典』，

駿河台出版社(2011)。
久松健一 1999.『英語がわかればフランス語はできる！』，駿河台出版社。
久松健一 2002.『英仏日 CD 付 これは似ている！英仏基本構文 100＋95』，駿河台出版社。
久松健一 2011.『ケータイ〔万能〕フランス語文法 実践講義ノート』，駿河台出版社。
藤田裕二／清藤多加子 2002.『英語もフランス語も 比較で学ぶ会話と文法』，評論社。
船田秀佳 2003.『英語がわかれば中国語はできる』，駿河台出版社。
古川裕 2001.『チャイニーズ・プライマー―New Edition―』，東方書店。
文化庁 1975.『国語シリーズ 別冊 2 日本語と日本語教育(文法編)』。
北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編／松岡榮志・古川裕監訳『現代中国語総説』，三省堂(2004)。
彭飛 2007.「『Ｖテイル』構文と【在＋Ｖ】【Ｖ＋着】構文との比較研究―【在＋Ｖ】構文の“在$_1$”～“在$_6$”をめぐって―」，彭飛編集『日中対照言語学研究論文集―中国語からみた日本語の特徴、日本語からみた中国語の特徴―』，和泉書院，287-326 頁。
益岡隆志 1993.『24 週日本語文法ツァー』，くろしお出版。
宮田一郎 1996.「進行，持続，過去の経験」，『中国語』1996 年 8 月号，内山書店，20-24 頁。
村松恵子 1988ａ.「―日・中語対照研究―日本語の「～テイル」の表現と，中国語の“-着”の表現」，『ことばの科学』第 1 号，名古屋大学総合言語センター・言語文化研究委員会，39-61 頁。
村松恵子 1988ｂ.「“着”の文法的意味」，『中国語学』第 235 号，中国語学会，76-85 頁。
目黒士門 2000.『現代フランス広文典』，白水社。
森宏子 2000.「平叙文における“呢”の機能」，『中国語学』第 247 号，日本中国語学会，267-281 頁。
森田良行 1989.『基礎日本語辞典』，角川書店(10 版 2005)。
森田良行 1990.『日本語学と日本語教育』，凡人社。
森山卓郎 1987.「アスペクト」，『ケーススタディ 日本文法』，おうふう，50-55 頁。
山田小枝 1984.『アスペクト論』，三修社。
吉川武時 1976.「現代日本語動詞のアスペクトの研究」，金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』，むぎ書房(1976)，155-327 頁。

陈月明 2000. ＜时间副词“在”与“着$_1$”＞，陆俭明主编／沈阳·袁毓林副主编≪面临新世纪挑战的现代汉语语法研究≫，山东教育出版社，536-547 页。
潘文娱 1980. ＜谈谈“正”“在”和“正在”＞，≪语言教学与研究≫1980 年第 1 期，北京语言学院，41-50 页。
肖奚强 2002. ＜“正(在)”、“在”与“着”的功能比较研究＞，≪语言研究≫2002 年第 4 期，华中科技大学中国语言研究所，27-34 页。
徐士珍编 1985. ≪英汉语比较语法≫，河南教育出版社。
叶盼云／吴中伟编著 1999. ≪外国人学汉语难点释疑≫，北京语言文化大学出版社。
張道眞编著≪實用英語語法(修訂本)≫，商務印書館香港分館(1978)。
张亚军 2002. ≪副词与限定描状功能≫，安徽教育出版社。

用例出典

古石篤子 1999.『金色の眼の猫 絵本編』，駿河台出版社。
张海迪《轮椅上的梦》，中国青年出版社(1999)。

（原稿受理年月日　2012 年 11 月 26 日）